

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The semantics of English prepositions at/in/on :
semantic extension and the division of pragmatic
labor

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/696

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



¹ *at/in/on* の意味論

——意味拡張と語用論的分業——

山 口 治 彦

1. はじめに

英語の前置詞 *at/in/on* の用法は、しばしば学習者を当惑させる。とくに時間を表す用法については、その度合いが強い。

たとえば、瞬間的で点的な時間は *at* で表し、長めの時間には *in* を用いる。そして、その中間くらいの時間帯については、*on* を当てる。というのが、3つの前置詞の使い分けに関して学習者が目安とする一般的な見方だ。だが、このような考え方にはいくつかの問題がある。

朝と夜は同じくらいの長さのはずだ。いや、夜のほうが長いかもしれない。しかし、“*at night*” と「夜」には *at* が用いられ、そして、「夜」よりも短いかもしれない「朝」は“*in the morning*” と *in* が使われる。そして、「朝」と「夜」を含む「1日」を表すはずの曜日には、“*on Wednesday*” のように、*on* が当てられる。学習者が戸惑うのももっともだ。この不規則さはときに研究者をも惑わせる。

だが、Wierzbicka (1993) は、このように一見ランダムに思える使い分けにも、意味上の動機づけがあると説く。そして、*night* がなぜ慣習的に、しかも無冠詞のまま *at* と結びつくのか、曜日と共起する *on* がどのよう

1 本稿の内容については、対照研究セミナー (2011/04/17) や私の担当する授業で考えを述べる機会が何度かあった。話を聞いていただいた皆さんに御礼申し上げます。また、昨年、神戸市外国語大学を退職された和田四郎先生にも、断片的な私たちではあったけれど、研究室や研究会の席上で何度か私の考えを聞いていただいた。長年お世話になったことも含めて、改めてお礼申し上げます。

な意味を持つのかを説明する。

Wierzbicka のこのような見解とアプローチ方法は、英語のコロケーションを単なる慣習のせいにはせず、「最初に意味ありき、形を求む」という考え方を徹底する点で、意味論や語用論、もしくは機能的文法の観点から特に好感が持てるものだ。

だが、やはり問題もある。上述の前置詞（特に *on*）が空間的意義から、どのような経緯を経て時間的な用法を獲得するにいたったのか、その点がいまいである。小稿は、Wierzbicka の見解に基本的に同意しつつも、英語の基本的な前置詞 *at/in/on* の空間用法から時間用法への拡張の経緯と論理を明らかにすることを目指す。ことに、前置詞 *on* が曜日のような特定の日と結びつく理由について、彼女の論考を補完したい。

まず、Wierzbicka (1993) の概略を示し、その功績を認めたくえて問題点を取り上げる（2節）。次に、上記3つの前置詞の空間用法における分業の様子を確認し（3節）、それが時間用法へと拡張されるにあたっての問題を考察する（4節）。さらには、前置詞 *on* の時間用法への意味拡張について具体的な考えを述べたい（5節）。

2. Wierzbicka (1993) の功績と問題点

この節では、Wierzbicka (1993) の前置詞 *at, in, on* の時間用法に関する説明の概要を示し、その利点と補完すべき問題点について明らかにする。

2.1 同時を表す *at*

Wierzbicka は、*at* は時間が同時であることを表す (p.438)、としている。この考え方は、*at* が空間用法において面積を持たない点を指し示す、という一般的な見方に通じる。つまり、ある出来事が生起する時間が特定の時間と一致するということは、その出来事の生起時刻が時間軸上の一点を指し示すことである。*at* は、時間の長さが感じられない、点と認識される出来事

や現象と結びつけられる。

しかし、ひとつ問題が残る。“at night”という表現だ。

Wierzbicka は、“in the morning”とは違い、*night*が無冠詞であることに着目する。“at night”の*night*は、具体的な特定の時間を表すのではなく、夜という時間の種類を表している (p.439) というのだ。そして、夜という時間に対して私たちが時の経過を感じないのは、文化的慣習の裏づけがあると主張する (太字は原著者による)。

- (1) But at night-time people usually sleep, or at least relax after work, and they are not similarly attentive to the progress of time; in fact, night-time is a time when people largely **stop** monitoring the progress of time. (p.439)

たしかに、*evening*と*night*の違いを考えれば、彼女の説には説得力がある。たとえば、(2a)は会話の開始を示す挨拶のことばとなるが、(2b)は、通常、会話の終了を示し、そこで会話という活動が打ち切られる。*night*は、*morning*や*evening*と違い、私達はその経過を追うことのない、いわば止まった時間なのだ。

- (2) a. Good morning/afternoon/evening.
b. Good night.

もちろん、具体的な時間を指さず、時間の種類を指すというのは、*night*に対する慣習的なとらえ方である。だから、Wierzbickaの言うように、夜警などで夜間の時間経過を特に意識すれば、(3a)に見るように、“in the night”という表現が可能になる。

- (3) a. In the night, I heard a strange noise.
b. *At the night, I heard a strange noise.
c. At night, I often hear strange noises. (p.448-449)

(3a) は、夜の特定の時間帯を示すので定冠詞 *the* が必要になる。これに対し、(3c) は特定の時間を意識しない非活動的な習慣的時間を表す。(3a) とは異なり、時間の経過を感じさせない。1日のなかで夜という種類の時間において、しばしば妙な物音を聞くことを伝える。

2.2 *in* と部分の概念

次に、前置詞 *in* は、Wierzbicka によると、部分の概念を持つものと共起する (p.442)。このとらえ方も、長さを意識させる時間帯には *in* を用いるという一般的な考え方と矛盾しない。時間の流れを始めと終わりで区切れれば、当然のことながら、この時間帯は始めと中と終わりという部分からなるからである。

では、一日という単位を表すはずの曜日は、なぜ *in* と共起しないのか。これは、*month* や *week* が *day* という部分からなるが、*Thursday* のような曜日はそのような部分を持たないからだ、Wierzbicka は言う (p.443)。その証拠に、“*the morning of Thursday*” のように *Thursday* の内部に言及する言い方は、英語では許されない (p.444)。曜日を問題にするとき、その曜日における時間の経過は認知されないのである。

2.3 *on* が持つ指定の意味

では、曜日と共起する *on* が持つ意味はどのようなものか。Wierzbicka の意見はこうだ。つまり、*on* は、区別可能なユニットの連鎖のなかから、容易に特定できるひとつのユニットを取り出す (p.445)、というのである。「週」は、「曜日」という区別可能なユニットの連鎖 (月・火・水・木…) で

あり、そういったユニット連鎖の選択肢から特定の曜日を指定する際には *on* を使う。同様に、「月」も（「週」ではなく）「日」というユニットからなる連鎖であり、そこから特定の日にち（例：Nov. 1st）を指定する場合に、*on* が用いられる。

on が容易に特定できる対象を取ることができる根拠として Wierzbicka が挙げるのは、*on* の空間用法にしばしば付随する視認可能性である。視認可能性について、彼女は次の例を引いて説明する（視認可能性については、さらに、Beitel et al. (2001) を参照）。

- (4) a. There is a postcard in the book.
b. There is a postcard on the book. (p.446)

in を用いた (4a) の場合、問題の葉書が本のどの部分にあるのかは目で確認できないことがあるのに対して、*on* を用いた (4b) なら葉書がどこにあるのかは、見れば分かる。このような空間用法における視認可能性に対応するかたちで、“on Thursday” と言えば、それがどのような時間のユニットを指し示すのか容易に認知可能である、というのである。

2.4 Wierzbicka (1993) の問題点

以上が、*at/in/on* の時間的用法に対する Wierzbicka の見解である。簡単にまとめると次のようになる。

- (5) *at*: 明確な参照点と時間的に点で一致する
in: 部分を構成する（＝一定の長さのある）時間枠のどこかに位置する
on: 一連のユニット連鎖のなかの容易に特定可能なユニットを指定する

私は、Wierzbicka のこのような意見に基本的に賛成である。「だって、ネ

イティブスピーカーはそう言うのだから、そう覚えなさい」といった、よくある説明放棄の慣習主義を廃して、意味を重要視する。説明を重視する。そのようなアプローチには共感を覚える。

だが、やはり問題がないわけではない。

at/in/on の時間的用法は、より具体的な空間用法から拡張されたと考えべきだ。だが、Wierzbicka の説明はこの意味拡張の経緯をじゅうぶんに示してくれはしない。そのため、特に前置詞 *on* に関して以下の2点が問題になってくる。

まず、視認可能性に関わる問題である。Wierzbicka は (4) で示したように、空間用法で “A on B” の関係になっていれば A は容易に視認できることをアナロジーに用いて、時間用法においても時間ユニットが容易に特定できることを説明していた。もしも、視認可能性が *on* の空間用法のもっとも中心的な意味合いであり、その特徴が時間用法にも投影されたのだというのであれば、この主張もある程度は了解できる。しかし、視認可能であることは、*on* のもっとも重要な意味であるとは言いがたい。したがって、空間用法においてある対象が視認可能であることが時間用法にそのまま写像されるかどうかは、明確な根拠を持って主張することができないはずだ。

いや、何よりも、“on Thursday” といった表現において前置詞の目的語となる *Thursday* が認知されやすいのは当然のことである。私たちは前置詞の目的語に当たる対象物を地として既知のものとして把握し、その上で図となる対象を認知するからだ。他方、(4b) の “a postcard on the book” について Wierzbicka は、“a postcard” が視認できるかどうかを問題にしている。それでは、図と地を混同したことになる。“on Thursday” に関する議論をするのなら、“on the book” のところが問題となるべきはずだ。

要するに、“on X” の X が容易に認知可能であることを議論するのは、あまり意味がない。大事なことは、*on* の時間用法がどのような経緯で「一連のユニットの連鎖のなかから特定のユニットを選び出す」といった意味を獲

得したのかの説明を求めることだ。

次に、Wierzbicka は時間用法における *on* が時間的な長さとは相容れないことを主張するが（そして、それはおそらく正しいと考えるが）、その理由が明確ではない。*on* が、*in* とは異なり、時間の幅を想起させない理由が明らかになれば、彼女の見解はさらに説得力を持つだろう。

この件に関連して付言しておきたいのは、冒頭で成立しないと述べた *at/in/on* の時間用法の段階的なとらえ方である。つまり、瞬間的で点的な時間が *at* で、長めの時間には *in*、そして、その中間領域が *on* という考え方だ。このような考え方を *at/in/on* に関する「時間の段階的モデル」と呼ぶことにしよう。

時間の段階的モデルには、すぐさま矛盾点が想起されるものの、それなりの説得力を持つようだ。学習者だけでなく、名のある研究者もときにこの考えに引きずられる。Lindstromberg は以下のように述べている（下線は山口による。強調は原著者のもの）。

- (6) *IN* is used especially when the Landmark represents a time which is long enough for us to be able to think of it as a frame or space that something can be in, e.g., □ or even □·. When we are thinking instead of points in time, we use *AT*. In intermediate cases (a day or a section of a day such as morning) we can use either *ON* or *IN* depending on our perspective, although it is also true that certain expressions are rather fixed by convention.

(Lindstromberg 2010: 77)

下線を施した部分に段階的モデルの考え方を見て取ることができる。もっとも、ここで Lindstromberg は単純に段階的モデルに依拠しているわけではない。（だから、その分だけ主張が中途半端になってしまい、“we can

use either *ON* or *IN* depending on our perspective” や “although it is also true that certain expressions are rather fixed by convention” のくだけりになると、ほとんど説明を放棄しているかのようだ。) Lingstromberg は、段階的モデルに反例があることに気づいている。にもかかわらず、このモデルを持ちだしてしまうのには、それなりの理由があるはずだ。この問題については、次節で検討してみよう。

3. *at/in/on* の空間用法と語用論的分業

2 節では、Wierzbicka の見解にはかなりの説得力が認められるものの、問題点を残していることを確認した。彼女の見方を補完するべく、本稿では、空間用法から時間用法への意味拡張のプロセスについて、より注意を払うことにしよう。そのためには、まず、*at/in/on* の空間用法の意味の関係を明確にする必要がある。そこで、3.1 節では、Quirk et al. (1985) の次元にもとづく整理を取り上げ、この見方の不備を修正することで *at/in/on* の空間用法における対立関係について理解を深めたい。さらに、3.2 節では、Horn の語用論的分業の概念を導入し、3 者の対立構造と *on* のもつ意味合いを明らかにしよう。

3.1 Quirk et al. (1985) の次元にもとづく整理

Quirk et al. は、英語の空間用法を表す前置詞の関係性を示すために、図 1 のように、前置詞を次元ごとに分類した。

at/in/on を 0 次元、1 + 2 次元、そして 2 + 3 次元にそれぞれ分類して、表の中心に据える。そして、これらに対応した否定的意味を持つ *away from*, *off*, *out of* を加え、合計 6 種類とする。さらには、これら 6 つを到着点とする動きを表す前置詞類 *to*, *onto*, *into*, *from*, *off*, *out of* を対応させる。このようにして、一群の前置詞類が次元という基準にもとづいて統一的に表示される。一見したところ、非常によくまとまっているように見える。









destination position		destination position		
<i>to</i> → X	<i>at</i> • X	<i>(away) from</i> X →	<i>away from</i> X •	DIMENSION-TYPE 0 (point)
<i>on(to)</i> 	<i>on</i> 	<i>off</i> 	<i>off</i> 	DIMENSION-TYPE 1 or 2 (line or surface)
<i>in(to)</i> 	<i>in</i> 	<i>out of</i> 	<i>out of</i> 	DIMENSION-TYPE 2 or 3 (area or volume)
POSITIVE		NEGATIVE		

図1 : Quirk et al. (1985: 674) の前置詞が表す空間関係と次元

だが、この分類にも問題がある。

次元と前置詞を結びつけるアイディアはおもしろい。だが、Dimension-Type 0はよいとしても、Dimension-Type 1 or 2とDimension-Type 2 or 3とは重なり合うので、結局、次元にもとづいた整理がきちんとできたわけではない。このような中途半端な分類になってしまったのは、前置詞が表す現実の空間的配置と、話者が前置詞に対して持つ認知的な空間配置を混同したためである。前置詞 *in* が表す空間配置は、現実の対象物の関係を見れば、たしかに2次元的なものと3次元的なものがある。

- (7) a. To subscribe, simply fill in this box with your email address.
 b. There were at least ten chocolates in this box last night.

(7a) は、インターネットのホームページ上に設けられた四角のスペース(箱)の中にアドレスを記入せよというもので、“this box”は2次元の空間を表す。これに対し(7b)は、縦横高さのある箱の中にチョコレートが10

個はあったと言っているわけで、3次元の構造体を問題にしている。現実の対象物を見比べると、*in*を伴って表現されるものには、たしかに3次元のものと2次元のものがある。

では、(7a)と(7b)で問題にした空間的配置(「箱」)は本質的に異なるものと考えて、別々に分類したほうがいいのか。いや、そうではあるまい。*box*が表す空間は、基本的に3次元である。平面に書いた四角であっても、これを「箱」というときは、その構造を3次元の構造体になぞらえてとらえたからこそ「箱」と呼ぶのであって、「箱」には本来2次元のものと3次元のものがあるという前提で前置詞の記述を行うべきではない。ことばの用法について考えるとき、現実がどのように対応しているかに気を取られすぎるのではなく、私たちがどう見たか、どのように認知したかを問題にするほうがいい。*in*はある対象が3次元の空間の内部に存在することを表す、と考えたほうがいい。

とすると、図1の*at/in/on*の区分は、それぞれ0次元、1+2次元、および、3次元と改めるべきである。*at*が点での一致、*on*が線もしくは面の接触、そして、*in*が容れ物の内部にあることをそれぞれ表すとすれば、3者が表す空間配置は図2のように描き直すことができる。上段が3次元

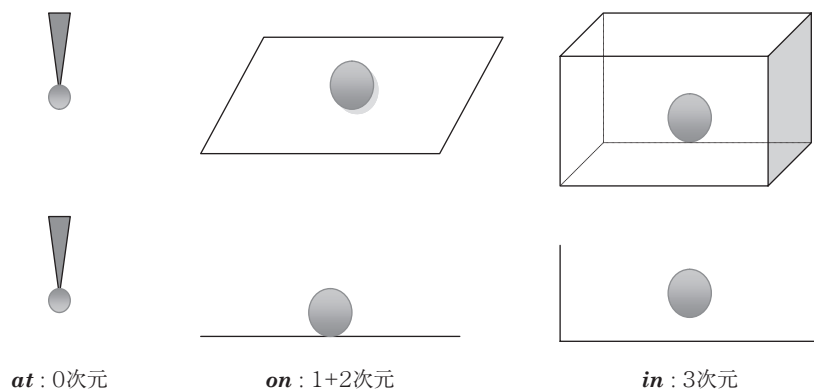


図2: *at/on/in* が表す空間配置

な作図を行ったもので、下段は2次元的な簡略図である。

このように考えると、次元構成の終端である0次元と3次元を *at* と *in* がそれぞれ占めて、そのあいだの1次元と2次元を *on* が担当するという分業体制が見て取れる。この前置詞と次元の対応関係は、Horn の語用論的分業という概念に照らし合わせると、前置詞 *on* の性格がより鮮明になるだろう。だが、その前に、前節で取り上げた時間の段階的モデルについて少し触れておこう。

at/in/on を次元という概念でとらえると、0次元の *at* から、1・2次元の *on* へ、そして3次元を必要とする *in* へと、一定の序列化ができる。さらに、*at* が対応する「点」は面積も体積も持たない。*in* が対応する「容器物」には容積や面積の概念が（たとえば底面積というようなかたちで）必然的に関わってくる。すると、区切られた平面を表すわけではない *on* を、面積を表すものとして大小の軸の中間に割り振ることは理屈のうえで問題が残るものの、*at* → *on* → *in* の序列化に大小のスケールを感覚的には違和感なく重ねることができる。もちろん、*at* が小ささの極に対応し *in* が大きさの極に対応する。そして、*on* は否応なく、その中間を割り振られる。前節で考察した時間の段階モデルは、このような経緯で生まれたものだろう。この大小のスケールを時間的長さに写像したら、時間の段階的モデルの出来上がりである。感覚的にわかりやすいので、反例があろうとも、ひとつの目安として時間の段階的モデルは重宝する、というわけだ。

3.2 *at/in/on* に見る（緩やかな）語用論的分業

Horn の語用論的分業（Division of Pragmatic Labor）という概念は、ふたつの（複数の）似た意味を持った表現が互に対抗する場合の意味の取り合い現象について述べたものである。概略、以下のようにまとめることができる。

- (8) 対立しあう表現があるとき、無標 (unmarked) の表現が中心的な意味領域を取り、有標 (marked) の表現は、その残りの周辺の領域を取る。
(Cf. Horn 1984: 22)

たとえば、日本語の「ワイン」と「葡萄酒」がその良い例だ。「ワイン」はふつうに使われる語彙（無標の表現）であるのに対して、「葡萄酒」ということはめったに用いられない。かなり珍しい（有標の）表現である。この場合、両者は同じ論理の意味を有しているが、ぶどうから作った醸造酒について語る場合は、ふつう「ワイン」という表現を用いる。（だから、レストランで「赤葡萄酒をください」と言うのは、少し勇気がいるはずだ。）そこで、「葡萄酒」という表現は「ワイン」という語が一般には用いられない用途をカバーすることになる。たとえば、旧家の蔵のなかから大正時代のワインのボトルが見つかったような場合、「葡萄酒の瓶を見つけた」と表現するのは、状況にふさわしい表現と言える。「葡萄酒」には、「ワイン」にはない何やら時代がかかったニュアンスが付いて回る。

Horn の念頭にあったのは、おもに2つの表現が対抗する場合であったが、この語用論的分業の意味領域の取り合いの概念を *at/in/on* の対立に適用してみよう。3者は、ある対象が別の対象と特定の空間配置にあることを表現する点では同じである。異なるのは、対象物を認知する際に次元が関与する様式である。

at は、その点、非常にわかりやすい。対象 A と対象 B が 0 次元の点で一致することを表す。*in* も同様にわかりやすい。空間を内外で仕切る「容器物」という構造物は 3 次元の空間を必要とする。つまり、空間配置として非常に明快な *at* と *in* がまず、次元構成の両端（0 次元と 3 次元）を占める。そして、*on* は残りの中間部分—1 次元と 2 次元—を担当する、という分業が見られる。次元という基準を導入したとき、*on* のみが複数の次元を担う理由を、（あくまで仮説ではあるが）語用論的分業という観点に求めてみた

いのである。このような見方が正しければ、*at/in/on* の対立は、3者が対等に対立し合う3項鼎立のパタンではなく、*at* と *in* が *on* に対し優位にある対立関係ということになる。

もっとも、ここで、空間配置を表現するという点では共通するものの、認知的意味が等価ではない3者を分業の概念で捉えることに関しては、異論があるかもしれない。また、Horn の考える有標／無標の区別には、より労力を有するか否かという観点が重要になるため、すべて1音節の *at/in/on* に対して適用することに違和感を持つ向きもあるかもしれない。実際、「ワイン」と「葡萄酒」や“shoot someone”と“shoot at someone”の対立のようには、明確な意味上の分業が見られるわけではない。この節の見出しを「*at/in/on* に見る（緩やかな）語用論的分業」と、「緩やかな」という修飾語を添えたのもそのためだ。

しかし、それでもここで語用論的分業の概念を導入するのは、ひとえに、*at/in/on* の対立が、それぞれの項が対等である3項鼎立ではないことと、この対立のなかでの *on* の特殊な位置づけを強調したいからにほかならない。このような対立関係を念頭において、3つの前置詞の空間用法から時間用法への意味拡張を眺めた場合、*on* の意味拡張の特徴が理解しやすいと思うのだ。

次節では、*at/in/on* の間に見られた対立関係が、時間の領域に写像される過程でどのようなことが起きるのか確認する。

4. 時間用法への意味拡張と分業の問題

では、*at/in/on* の空間的意味がどのように時間用法へと拡張するのかについて考えてみよう。*on* が時間用法において時間の長さを含意するものとは共起できないことが理解できるはずだ。

まず、*at/in/on* が表す基本的な空間配置は、先に見た図2のようにまとめることができる。この空間的配置を時間の領域へと写像するのだが、ターゲットとなる時間の領域を直線に表示する。時制などを論じるときにおなじ

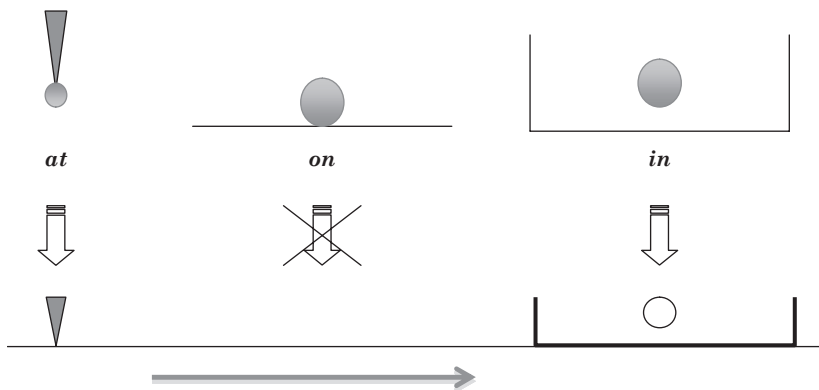


図3：at/on/in の線的時間モデルへの写像

みの線的な時間モデルである。時間の概念化には、複数のモデルが考えられる（たとえば、真木（1981）を参照）。だが、時間の長さを表示できるもっとも単純なものが、過去から未来へと流れる時間を直線で表記する線的モデルだ。その様子を図示したのが図3である。

非常にわかりやすい空間配置を表す *at* の点の一致の概念は、時間の線状モデルにおいても、一点を指し示すものと考えてよい。*at* は時間軸上の点を指し示す。

次に、*in* は時間軸を始めと終わりで区切り、ちょうどその線分を囲い込むようなかたちにすれば、横から見た容れ物が時間軸上に現れる。図3の表示からもわかるように、*in* の時間用法は常に時間の長さを想起させる。

ところが、*on* は単純な時間の線のモデル（1次元モデル）に写像しようとしても、占めるべき位置が存在しない。直線上に表示できる時間の種類は、点と線分しかない。そして、その両者は、すでに *at* と *in* によって押さえられている。*on* の居場所はここにはないのだ。

on が時間の線のモデルに表示できないことから言えることが、2点ある。そのひとつが、*on* は時間的な長さにはかかわらないということである。時間の線のモデルは、時間を表すもっとも単純なモデルで、私達が時間の長さ

を認知する際に大きな役割を果たしている。しかし、線のモデルに *on* が取るべき位置がない。つまり、時間の長さとは *on* とを関係づけにくいのである。時間用法に比喩的に意味拡張を行う際に、*on* が時間の長さとは関係づけられる契機が失われているのである。²

次に、*on* が表す位置関係は線のモデルに写像できないのだから、*on* が何らかのかたちで時間的用法を獲得するには、線のモデル以外の比喩を利用する必要がある。つまり、*on* の時間的用法は *at* や *in* とセットで拡張されるのではなく、*at* と *in* とは別個に拡張される必要がある。この点からも、3者を大小のスケールにまとめて写像する時間の段階的モデルが間違いであることが理解されるはずだ。

では、*on* の曜日を表す時間的用法はどのようにして拡張されたのだろうか。最後にその見当をつけておこう。

5. *on* の意味拡張

on の意味拡張を考えると、その起点となる中心的意義をまず措定しなければならぬ。小稿では、図2にも示したように、空間用法の「接触」が *on* の中心的意義であると仮定している。標準的な考えでもあるので、この点についての異論は少ないだろうが、³ 先の語用論的分業の観点から意見を

2 *on* が時間の長さとは相容れないことを意味の比喩的拡張の観点から説明するとそのようになる。他方、曜日の概念が長さを持ちえないことは、図と地の関係から説明できるように思う。

「曜日」は必ず「週」を背景として認知される。「月曜」といえば「週」という連鎖の最初の（「日曜」から数えるなら2番目の）ユニットというふうにとらえられる。とすれば、地の部分の「週」を念頭に入れながらも、「図」に当たる「月曜」の中身まで覗くことはむずかしいように思う。

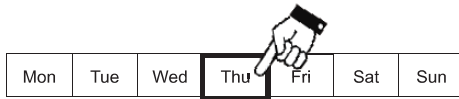
3 Lindstromberg (1997, 2010) は *on* に2つの中心的意義（文字通りの意義）を想定している。ひとつは「接触」であり、もうひとつは「運動の継続」(continuation of movement) である。このような説明を行う背景には、「接触」から「運動の継続」をうまく展開できなかった、という事情があるのだろう。だが、この件に関しては、『英語多義ネットワーク辞典』の次の記述を参考にすべきだ。「<活動・行為など>に接して」の意義は、物事の動き「に接して」いることで、物事とともに進行することを意味する」（瀬戸 2007: 654）。つまり、「運動の継続」を表す用法には、たいてい活動や行為に一定の方向性があることが前提となっているが、*on* は本来、当該の活動や行為がその方向性にそって起こることを「接触」の概念によって表す。当該の行為や活動がこの方向性から逸れないのであれば、当然、当該の行為は順方向に展開され続けることになる。このような経緯で「運動の継続」の意義が生まれたのではないかと思う。

申し添えておく。

3.2節では、次元構成の両端である0次元と3次元を *at* と *in* がそれぞれ担うことになったので、*on* は残りの1 + 2次元を担当することになったと考えた。このように考えた背景には、英語では *at/in/on* が代表的な前置詞であり、基本的な空間配置をこの3者が引き受ける、という前提がある。実際、点で対象と一致する *at* も、容れ物の内部に対象を含む *in* も、非常に明瞭な空間配置を表している。そして、「残りもの」担当の *on* が担う「接触」の概念は、ある対象が1次元と2次元の構造物に対してとりうる空間配置のなかでもっとも明瞭なものである。ある対象が面や線の上方や下方、周囲や左右にあると言うよりも、接触していると言うほうが、はるかに明確に当該の対象との位置関係を指定できる。*at/in/on* の分業は、その意味でも理にかなった構造をしている。

さて、中心的意義が定まったので、あとは、「曜日」や「日にち」を指定する *on* の時間用法が「接触」から比喩的に拡張されたものであると示せばよい。Wierzbicka が指摘したように、「曜日」や「日にち」は、「週」や「月」といった母体となるユニットの連鎖のなかの個々のユニットとして把握されている。つまり、図となる「曜日」や「日にち」の部分は、地である「週」や「月」という背景ごと認知されている。そのことを念頭において、一連のユニット連鎖のなかから特定のユニットを指定する様を図示したのが図4の a と c である。

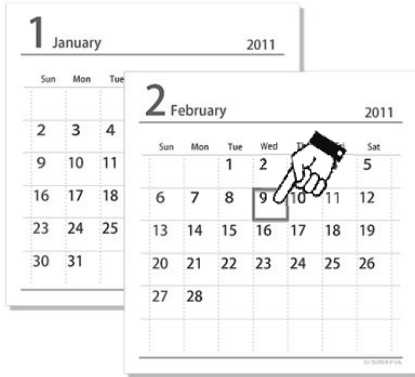
この「曜日・日にちの指定」の意義を図示したものは、それぞれ直線への接触と面への接触を図示したもの (b および d) とよく似ていることに留意されたい。ただし、「曜日・日にちの指定」の意義で、一定の行為が具体的に接しているのは当該の「曜日」と「日にち」であって、それを含む「週」や「月」に直接的に接しているわけではない。だから、図4の a と c に b と d をすぐさま対応させるのは無理がある。ただ、先ほども述べたように、地として同時に認知される「週」や「月」も図示しないと、この用法を説明



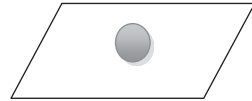
a. 「週」から「曜日」を指定する



b. 線に接する



c. 「月」から「日にち」を指定する



d. 面に接する

図4：連鎖のなかから特定のユニットを指定する

したことはない。地である「週」や「月」を視野に収めながら、当該の「曜日」や「日にち」を指定する、つまりそれらと接することを表すのが、「曜日」や「日にち」を表す *on* の用法なのである。そこで、図4の a と c のように、線や面への接触という関係性に、「曜日」や「日にち」が内在する図と地の関係を単純に加えてみた。

興味深いことに、この概念は *at* や *in* では表すことができない。*at* は点で対応するので、「週」や「月」といった地の部分（背景）を視野に収めることができない。他方、容器物に目が行く *in* は「週」や「月」の部分しか念頭に置けない。だからこの用法を担当するのは、基本的な空間・時間をあらかず *at/in/on* の3者のなかから選ぶなら、*on* でなければならないのである。

最後に、*on* が担うほかの時間的な用法と「曜日・日にち」の用法と比較

しておこう。

- (9) a. cash on delivery
- b. video on demand
- c. On entering the room I was so disappointed.

(9)に見られる意味拡張のパターンは、「曜日・日にち」の用法に比べると単純である。運び届ける、要求する、そして部屋に入るという行為をひとまとまりのものにとらえ、その行為に接するかたちで、お金を払う、ビデオを配信する、がっかりするという行為が即座に行われる、というわけだ。そこには「曜日」に付随する図と地の関係は関与しない。たしかにそういった違いはあるが、(9)の用法も、「曜日・日にち」の用法も、物理的な接触という概念を、ある行為と別の行為との、もしくはある行為と一定の基準時との、時間的な接触へと拡張してきたことに変わりはない。それが *on* の時間用法の基本だ。「曜日・日にち」の用法には、上で述べた「曜日・日にち」の特殊性——図と地の関係——がこの基本に重ね合わせられるのである。

参考文献

- Beitel, D. A., R. W. Gibbs and P. Sanders. 2001. The embodied approach to the polysemy of the spatial preposition *on*. In Cuyckens, H. and B. Zawada (eds.) *Polysemy in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 241-260.
- Horn, Laurence R. 1984. Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. *GURT 1984*, pp.11-42.
- Lindstromberg, Seth. 2010 (1997). *English Prepositions Explained (Revised Edition)*. Amsterdam: John Benjamins.
- 真木悠介. 1981. 『時間の比較社会学』岩波書店.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 瀬戸賢一 (編). 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans 2001. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 和田四郎. 2006. 前置詞意味論序説. 『神戸外大論叢』 57, 41-60.
- Wierzbicka, Anna. 1993. Why do we say *IN* April, *ON* Thursday, *AT* 10 o'clock?: In search of an explanation. *Studies of Language* 17:2, 437-54.